

曾我量深先生を偲びて

松 原 祐 善

一 大谷大学の学風

只今、御紹介をいただきました松原でございます。私は、大谷大学におきまして、昭和五十五年の春でございますが、学長の任期満了ということでごらさせていただきました。今日まではや八年に及ぶのでないかと思うのでございます。その間、私は一年おきに大病を患いまして五十六年の春、静岡の赤十字病院にて手術を受けて、一ヶ月程入院しておりました。次の一年を置いて、五十八年でございますが、夏、福井県立病院で、直腸と肛門とを切除して、人造肛門を造っていただきました。実はこの時は私も死を覚悟していたのですが、この手術のお陰で生き延びたんです。文字通り生かされて生きたというわけで、感謝しているのです。それからもう一ヶ年を経まして六十年の春から両眼を患い、だんだん全盲に近くなりまして、これも夏、友人の眼科の病院で手術が成功しまして、目が見えるようになり、文字も読めることになりました。世界が明るくなりました。私は今回こうして長年お育てをうけた懐しい大学に寄せて戴きまして、おそらくこれが最後の御礼参りになるのではないかと思うのでございます。私もはや八十一歳という老齡を迎えて驚ろいてるのでございます。

ところで私の生涯を通して一番の幸福は、私は大谷大学に於て、曾我量深先生と金子大栄先生のお二人から、同時

に教を受け、御指導を賜ったのでございます。これが今生の無上の幸せであり喜びでございます。このたび曾我先生の十七回忌法要が種々の事情があって、大学では九月に延期され、真宗学研究室の主権となって勤修されることになり、非常にありがたく思っています、田舎から出てこいとお引きをうけまして喜んで、両手両足の不如意も忘れて出席させていただいたのであります。

先程もはじめにお話がありましたように、曾我先生の御命日は昭和四十六年の六月二十日でございます。私は福井県の奥越の山の者でございます。福井県では武生市の浄秀寺の境内に曾我先生の立派な名号碑がありまして、大きな自然石に先生の直筆の六字名号が彫られております。そして先生の御遺骨が納められています。この名号碑をお建てになったのは浄秀寺の先住さまの松原現筈師と申されまして、私よりも十一歳年上の先輩になります。昭和九年ごろより曾我先生を自坊の浄秀寺にお迎えして、年に三回、春・秋と先生を御招待申し上げ、自分が先頭に立って先生の御講義や御講話を聴聞されたのであります。昭和十年と申しますと、先生の還暦の御祝いがありまして、記念講演として「親鸞の仏教史観」の大獅子吼がありました。松原師もこの記念祝賀会に出席されていまして、その後より、先生がお亡くなりになるまで三十五年間、年に三回先生をお迎えし、唯ひとすじに先生の御教を生涯かけて聴聞してゆかれました。名号碑の側の小さい石に「信に死し願に生きん」と彫られています。これは「信に死し願に生きよ」の先生の仰せに、松原師が今生ばかりでなく尺未来際にわたり「信に死し願に生きよ」に応答されているのであります。私ども福井県のものに多く曾我先生との御縁を結ばせて貰いましたのはこの松原師の導きによるものと感謝いたしています。

今日御令息のいまの住職さまもこの法要の席に出席されておられますが、六月二十日の曾我先生の十七回忌の御命日の当日は京都の御自宅で法要がおつとまりになりますので、その前日の十九日にわれわれ福井県側の御同朋は浄秀寺さまの名号碑の前で読経の勤行をいたし、本堂において記念講演をいたしました。一番年上の私が「他力の自覚

道」と題して、この曾我先生のお言葉を思い起こしてお話申し上げました。聴聞者も多く集まりました。なかなか盛大でした。

この会場には富士市の月愛苑の佐伯静さまもご出席でございますが、月愛苑では曾我信雄先生をお迎えして六月十九日に盛大に十七回忌法要が営まれましたことをお知らせいただいております。大学ではいろいろの事情があり、特に印度学仏教学の大会の開催校でもありません。延びて今日に至ったというわけですが、私もこの尊い御縁をいただいて、ここに立たせて貰っていることを、ありがたく心から御礼申し上げます。

さて曾我先生が大谷大学の学長に御就任になったのは昭和三十六年でございます。三十六年春四月には東本願寺では親鸞聖人の七百回御遠忌が盛大につとまりました。九月、先生は八十七歳の老齢で学長を引き受けられ御就任になりました。私のごときは八十歳を超えたところで既に手足が不自由になっていますが、先生は八十七歳で身心ともに健康そのもので、お若い時から身体を非常に大事になされました。精神的にも氣力がみち充ちていました。先生はよく本能という言葉を用いられますが、純粹本能に生きておられたのであります。鈴木大拙先生の靈性であり、清沢先生の精神主義の精神に生きておられたのであります。

だからお歳をとられることがないのです。その学長就任の御挨拶に全学生に対してまず大谷大学の伝統の学風を説かれました。大谷大学の開学記念日は十月十三日ですが、明治三十四年（一九〇二）の十月十三日に、東京巢鴨の地に真宗大学が移転開学され、清沢満之先生を初代の学監（学長）として迎えて開学の式典が行われた日であります。当日の先生の開学之辞が有名であります。

ところで曾我先生は大谷大学の伝統の学風というものは、清沢満之先生を父とし、第二代学長の南条文雄先生を母として大谷大学独自の学風が開けてきたのであると仰しゃるのです。南条先生は清沢先生より十四歳も年上なんです。すでに明治十七年五月にはオックスフォード大学の九年間の留学をおえて帰国されていました。梵本『無量寿経』の

刊行、『大明三藏聖教目録』と經典一一の概要を英訳し、いわゆる南条目録を完成して、その学問的業績を以てオックスフォード大学よりマスターオブアーツの称号を得て帰国されているのであります。また当時清沢先生の先輩として宗門のすぐれた学匠もおられるなかに、三十九歳の清沢先生を初代学長に迎えられることは宗門全体の総意を担って先生はこれを引き受けられたのであります。

南条先生の回顧録に清沢先生について、先生は宗教的天才であるとほめられていますね。真宗大学の学生に接せられたのは一ヶ年程で、学長を引退されますが、学生に及ぼしたその感化は大したものであったと語っています。金子大栄先生は真宗大学第一回の卒業生ですが、当時清沢先生の学生への感化として、学生間の合言葉として、現在安住、現在安住と語り合つたと申されています。

清沢先生はまた南条先生に対して、南条先生は洪鐘のごときお方であると誉められ、撞木の振り方により無限の音響が、お答えとしていただける学徳の高い先生であることを仰しゃっておられますね。また南条先生は非常に辛抱強いお方だといわれるのです。九年間の英国留学により苦勞なされて研究された梵文『無量寿経』について、当時の宗門ではその自由の研究発表が許されないので。当時には楠木潜龍とか細川千敵とかその他ご講者がおられますね。新しい自由の研究は許してくれません。いわば南条先生は梵語仏教の草分けをなされ、言語学・文献学を真宗学に導入されてきたわけであり。その発表を辛抱強く待たれておられるというのです。

南条先生が東本願寺の安居本講に『無量寿経』を講義されるのは明治四十一年のことです。清沢先生はもう明治三十六年の六月に亡くなられています。ともあれ梵文『無量寿経』と漢訳『無量寿経』の五訳を比較対照した講本をおつくりになり、講義をなされました。はじめに欣喜雀躍というお言葉が見えますが、その喜びとご満足が思われず。

清沢先生が住田知見先生に語られた言葉として御講者には信心のないことを仰しゃっているのです。住田知見師も

なるほどと肯ずいておられますね。こうしたところに近代の教学の上に大きく時代を劃する事業が清沢先生から始まっていくということです。清沢先生以前に返ってはなりません。これは強く私も叫びたいと思います。清沢先生を父とし、南条先生を母として大谷大学独自の学風が開けてきたのです。学風というのは決して学閥というものとは異なるものです。学閥には自由はありません。束縛があるだけです。真の伝統の学風には自由と創造があるのです。自由と創造なきところに生命はありません。この伝統の学風を守っていただきたいと念願するものであります。

二一 曾我先生の法蔵菩薩論

さて次の年は曾我先生は八十八歳の米寿のお歳を迎えられます。昭和三十七年の十月であります。曾我先生の米寿祝賀会が東京で催されました、その記念講演として二日間にわたり東京大谷会館にて「法蔵菩薩」と題してお話がありました。この題は東京には同朋舎という同窓による同人の会がありまして、先生に求められたもので、それに応じてこの題でお話があったのです。これが後に鈴木大拙先生と金子大栄先生のお二人の序分が添えられて出版されました。当時の思想界に、またキリスト教の関係の方にも大きな影響を与えたのであります。

本書のなかのある箇所には、明治時代には浩浩洞の同人達ですら、『大無量寿経』に記されている法蔵菩薩などという言葉を使う人はなかったのである。ただ仏さまのお慈悲を信ずる、仏さまのお慈悲に助けられると申したのであります。私が、『成唯識論』を少しく学んでおりましたから、聖道門の方の学問では阿頼耶識というが、往生浄土の実際の方面では、一般の人たちには阿頼耶識ということは領解できないから法蔵菩薩の名前で教えて下さるのであります。阿頼識というのはシナの言葉に翻訳して「蔵識」と訳されていますから「法蔵識」とも読めるのであって、一切の法の蔵であるといわれます。そうすると阿頼耶識と法蔵菩薩とは思想的に何か深い関係があるように思われます。本書の六十四頁に「聖道門から言えば阿頼耶識をたてる。これは本当の自己、本当のわれでしょう。それで法蔵菩薩

というのは、言うてみれば仏さまでしようけれどもですね、つまり自分自身の心の深いところに仏さまを見出して行く、こうというのが、法蔵菩薩であろうと私は思うのであります。阿弥陀さまと言う時になれば、どうしても対象化されてくるかたむきがあるのでございますが、法蔵菩薩と言う時になると、はじめて自分自身の精神生活の深いところに仏さまの根というものを見出して行くことになる。自分自身の深いところに仏さまの根をもっておるのである。こういうことを教えるために法蔵菩薩ということ、『大無量寿経』は教えて下されてあるのであると、私は思うのであります」と語っておられます。

ところが先生の「法蔵菩薩阿頼耶識論」に対して、現在印度学仏教学会理事長をなされています平川彰教授により、当時法蔵菩薩の原語よりして「法蔵菩薩如来蔵説」を唱えて、「反対されているのであります。漢訳の五訳を見ても『大阿』は曇摩迦と音写し、『平等覚経』も曇摩迦留と音訳している。『無量寿経』は法蔵菩薩と訳し、『如来会』は法処比丘とあり、『莊嚴経』で作法比丘と訳されて、五訳のおの異ってはいはるが原語はあくまでも「ダルマ・アカラ」(Dharma-akara)である。『唯識論』の阿頼耶識の「蔵」は「アーラヤ」(āra)であってその原語は全く異なるのであります。アーカラは「鉢床」とか「鉢脈」の意味であり、アーラヤには「住処」の意味しかない。ヒマラーヤは雪の住処の意味であります。法蔵と蔵識とは一応合致点はあるが、原語において全く異なることを指摘されているのであります。平川先生は更にアーカラと如来蔵の関係を述べられ、如来蔵 (Tathagata-garha) と同系統の如来性 (Tathagata-gotra) の「性」(gotra) とアーカラ (akara) と同義であることを示し、その解釈の例証として曇鸞大師における『論註』上巻の浄土の性功德の解釈の文を引用して「法蔵菩薩如来蔵説」を展開されておられるのであります。私はこの所論に対して、曾我先生の「法蔵菩薩阿頼耶識論」は『無量寿経』に説かれる法蔵説話の非神話化の宗教的信の自覚的解釈であると申し上げたいのであります。そこに平川教授の学問的姿勢や学問的関心とやや異なるものがあるのであります。私はドイツの著名な神学者である、今は亡くなられているのですが、ブルトマン (R. Blumenthal) の『聖書』

における非神化 (Entmythologisierung) の提唱と合するものだと思います。曾我先生の法蔵菩薩阿頼耶識論は『無量寿經』の法蔵説話の非神話化のお仕事なんです。曾我先生は大正二年七月の『精神界』に「地上の救主」という論文を発表しています。その論文の副題に「法蔵菩薩出現の意義」と題されています。

先生は明治三十六年三月に清沢満之先生の浩々洞に入洞され、終生清沢満之先生ありて曾我量深ありと仰せられていました。明治三十七年に真宗大学の研究院を卒えられて、仏教学として唯識法相の学を専攻されました。卒業と同時に東京巢鴨の真宗大学の予科教授となつて唯識論を講ぜられると共に、当時の講義の手記として『七祖教承論』が金子先生のお手もとに遺こされていたのです。それがずっと後に『伝承と己証』と題されて出版されました、その「序」に、私が始めて真宗学に歩を踏み入れた記念であり、その後の私の運命と方向の指針であつたと述べておられます。

明治四十四年に東京の真宗大学が京都に移転されることになり、その騒ぎの中に真宗大学の教授を辞任して大正五年までの六年間、郷里越後の自坊へ帰えられて、その田舎から次々と『精神界』に論文を送られていたのであります。その田舎から送られた論文がいまの「地上の救主」であります。

この論文のはじめに「私は昨年七月上旬、高田の金子君（金子大栄師）の所に於て、「如来は我なり」の一句を感じ得し、次いで八月下旬、加賀の暁烏君（暁烏敏師）の所に於て「如来我となりて我を救ひ給ふ」の一句を廻向していただいた。遂に十月「如来我となるとは法蔵菩薩降誕のことなり」ということに気付かせてもらいました」ということから筆を起こされて、「法蔵菩薩は決して一人の史上の人として出現したまいたのではない。彼は直接に我々人間の心想事成に誕生したまいたのである。十方衆生の御呼声は高き浄光の世界より来たのではなく、又一定の人格より客観的に叫ばれたのではない。彼の御声は各人の苦悩の闇黒の胸裏より起つた。法蔵菩薩の本願を生死大海の船筏というは、御呼声が我が胸底我が脚下より起りしことを示すのである。世の一切の理想的宗教が「天の宗教」なるに對し

て、我法蔵菩薩の救済の宗教のみは唯一の「地の宗教」であらせられる。「光の宗教」は数多い、「船の宗教」は唯我眞宗ばかりである。我真宗のみ現実の宗教、眞の救済の宗教である」と述べられ、「法蔵菩薩とは何ぞや。他ではない、如来を念ずる所の帰命の信念の主体がそれである。彼の第十八願とは如来が親しく能帰の衆生の子心の実験の表白である」と語られています。そしてこの論文のなかに「法蔵菩薩は昔の神話ではない、現在の信の事実である。若し一念の信を離るれば一箇の神話と何の別もないのである。自余の浄土宗は信の一念を離れて、徒に憧憬の宗教たる故に幼稚なる神話宗教に過ぎない。法蔵菩薩の現実的基礎はないのである」と述べておられる。そして

「法蔵の発願の一念と我等獲信の一念とを以て絶対の一念とする時は、永劫以前の法蔵発願は現前の信念の裡に在る。此両箇の一念は同一念の初後である。その間の永劫の修行も、成仏以後の十劫も以て此両箇の一念を隔つるに足らぬのである」と言い切られておられるのであります。

実はこの論文に先だって「我等が久遠の宗教」と題する論文が明治四十五年七月の『精神界』に掲載されているのです。そのはじめに香樹院徳龍師が郷里の越後の三条別院において秋安居をおつとめになりました。午前は宗典を講じ、午後に『唯識三十頌』を講ぜられるのであります。ところがその講筵に列席した僧達の中には近在から朝は未明に寺を出で、夕べには星を戴いて帰らねばならないので、深く迷惑に感じ同師をお願いして午前中に両講義を終えられるように請われたのであります。ところが徳龍師は「それはいかぬ。宗部は絶対他力の妙宗、唯識は自力漸教の権説、その間に天地の間隔がある。徒に定義空想してならばいざ知らず、真面目に両教の幽旨に触れんとするもの、云何で直ちに引続き論じ味うことが出来よう。我々は午前は宗部に依りて深く他力の不可思議を味ひ、午後は唯識に依りて深く自力の無効を観ぜねばならないではないか」と静かに論されたということを伝えて、曾我先生はさすがに香樹院なるかなと感嘆されて「徳龍師の言の如く我等が他宗の学問や哲学を修むるは徒に此等の智識を運用して宗字を莊嚴にせんが為でなく、此に依りて深く自己の現実を観頭し、自力無効を反照せんが為である。宗字の意義此に在

る。而も自己の無能と云うことは甚だ明なる事実らしくあって、而も真に自己の無能を自覚すると云ふことは実に至難の事業である。此れ他力信仰の至易なるが如くして実に至難なる所以である」と述べられました更に「按ずるに天親論主の『浄土願生偈』は論主が自我の心中に顕現しつつ、而も自我を超越せる不可思議の能力を讃仰し、『唯識三十頌』はその不可思議力に依存しつつ、此に極力反抗する所の現実の自我妄執の告白懺悔である。罪業の云何に深く我執我見の云何に強きかを最も明瞭に示す者は三千年の仏教史上の産物として『唯識三十頌』に及ぶものはない」と添えられています。先生の真宗学を学ばれる真摯な学問姿勢を覗うことができます。このように先生が『大無量寿経』を拝読するに『唯識三十頌』を以てし、『唯識三十頌』を『大無量寿経』に照らして読まれてくる「法蔵菩薩阿頼耶識論」の端初をこの論文に窺うことができるように思うのであります。先生の晩年地方を巡回される場合はいつも随行なされていた藤代聆磨先生に、私が『唯識三十頌』に触れたのは十代の頃からであったと仰しゃっておられたという承ったのでありますが、そうすると京都の真宗中学入学以前の三条別院の教校時代にはや手にとられて生涯坐右から離されなかったのが『成唯識論』であったのです。もう先生の身についてしまっているのです。恐らく先生から私に対しブルトマンを持ち出すことは余計のお世話だとお叱りをうけるかもしれません。

三 師弟同一の信心

さて次の昭和三十八年六月には清沢満之先生の生誕百年を迎えて大谷大学講堂に於て記念の大講演会が催されました。講師は西谷啓治先生から「清沢先生の精神主義」の精神についてお話がありました。次に九十三歳の鈴木大拙先生から「清沢満之は生きています」という題でお話がありました。最後に曾我先生が立たれました清沢先生をお偲びしてお話をなされました。鈴木先生は生前清沢先生には一度もお会いされていないのでありますが、先生のお書きになったものを読んだと申されていました。清沢先生の『宗教哲学骸骨』は英訳されて、鈴木先生が最初の渡米中シカ

ゴの万国博覧会に展示されてあって、非常に高い評判であったと仰しゃっておられました。清沢先生は四十一歳という短生涯で終えられたが、先生のお書きになったものを読むと、人間として達しうる精神生活の頂点に到達されておられた。いまも清沢満之は生きているというお話で、そのお話をうけて曾我先生が、只今鈴木先生が清沢先生は生きているといわれましたが、それはどこに生きているかと申しますと、清沢先生は本能のなかに生きておられると叫ばれました。この本能のお言葉は先生はよくお使いでした。或る時先生は自分は四十頃から宿業本能という言葉を申しているのですが誰れもそれを使ってくれない。ただ一人棟方志功といわれる有名な青森県御出身の版画家が居れるが、私の宿業本能と書いた色紙を見て非常に感激されたことをきいていると仰しゃっておられました。京都にも本能寺というお寺がある。本来の能力というのでしょうか。本願・本能と熟されることもありませんが、先生は理知のおごりというものを非常に嫌いになります。知性・理性を超えて鈴木大拙先生の使用される靈性に通じ、清沢先生の精神と通ずるお言葉とします。本能と並んで莊嚴象徴という言葉をお使いになりますが、これも浄土の莊嚴が經典では天部の莊嚴の神話的表現になっているので、莊嚴を象徴と言ひ換えることで、象徴は形なきものが形をとり、形において形なき一如・涅槃の境界を表現することになります。先生は分別による実体論的世界観に対して浄土の象徴的世界観ということをおっしゃいますね。私もこの頃宿業本能という言葉を使用することができるようになりました。

さてもとへお話をもしまして、谷大の講堂には清沢満之先生の肖像画が掛けられていますね。この肖像は中村拆画伯の描かれたものです。中村画伯は『精神界』の表紙を描かれた方です。この方は清沢先生を非常に尊敬されておられました。生前の清沢先生に会っておられなかったのです。いま先生の肖像をといわれても先生のお写真によるほかはないのです。ところが写真では顔の色が解らないのです。そこで清沢先生のお顔の色は黒い方でありましたが、誰か先生と顔の色が似た方がないかというのです。清沢先生という方は背が低く五尺たらずで顔の色が黒かったのです。そこで浩々洞の同人達が口を揃えて曾我君の顔の色がよく似ているといわれるので、曾我先生がモデルにな

って描かれたものです。その清沢先生の額を指さして先生は、唯だ顔の色だけで肖像は描けるものではない、それ以外のものが一つでなくては描けるものではないと仰しゃるのです。言葉ではそれ以外のものと仰しゃるのですが、それ以外の大事なものといえは精神が一つである、信念が一つであると、ここに生きた肖像が描かれるのであると力強く叫ばれたことが今も忘れられません。あの清沢先生の肖像画を拝しますときに清沢先生と曾我先生とが二重映しになって拝めてくるのであります。

鈴木大拙先生と生涯の友であられた哲学者の西田幾太郎先生が大谷大学でわれわれ学生時代でしたが講演されたことがありましたが、日本に於ける哲学の草分けをなされたのが清沢満之と大西祝はじむのお二人であることを話されています。清沢満之は仏教皇であり、東本願寺の育英教校から東京大学の予備門に編入学されたのであり、大西祝はキリスト教徒であり、同志社を出て東京大学予備門に編入学された方であります。ともかく清沢先生からは大きなご恩をうけておる。大谷大学は清沢満之先生の大学だからというて、御自分の門下の優秀な方々を次々と大谷大学の予科教授に推薦下ってご援助下さっていたのです。私どもの学生時代は木村素衛先生に教わりました。その後先生最後の門下生であられる西谷啓治先生にずっと教授としてご援助をうけてきているのです。西田幾太郎先生は清沢先生には会っておられまして、顔の黒い背の低いお方であったと語っておられます。

曾我先生は引き続き清沢先生の思い出を語られてゆくのですが、当時仏教青年会というのがありまして、浄土宗の知恩院が会場で講演会が開かれました。清沢先生が講師として招かれていたのです。これは先生の骸骨時代のごとく、白衣に麻の衣をつけ、高い厚歯の下駄を履きコロコロと音をたてて歩かれておられました。その時分はまだ徳永満之と呼ばれていました。お歳はお若いですが、当時では一級の名士であられたわけです。会場につきまして徳永がきたと仰しやるのですが、受けつけの者は徳永先生その人とは思われなかった、先生の書生であろうと思っどどこかの部屋にお通したのです。時間が過ぎてまだ講師はお見えでないといっさわぎはじめたのです。ところがもう三十分も以前に

徳永と名の方が見えたが、あれは徳永先生その人であったのか、先生の書生とばかり思い誤っていたというわけです。そういう清沢先生であったが、しかし一度壇上へ立たれますと堂々として少しも背の低いお方とは感ぜられなかつたといわれます。

今一つ、清沢先生が三十四歳の時宗門改革を叫ばれ、洛東白川村に籠居されたのであります。ところが白川村では遠くて都合が悪いので、枳殻邸の近くの家を借りて事務所を開かれていたのです。そこへ同志の稲葉昌丸、今川寛神・井上豊忠・清川円誠・月見寛了といった先生方が控えておられるのです。無論清沢先生もそこにおられるのです。ところが地方から賛同して多くの方が上洛してこられるのです。まず清沢先生に挨拶をせねばならないというわけですね。ところが関根仁応先生と同窓の九州の江上大成という学生がおられました。現在大谷大の助教授をしておられる江上浄信さまの祖父にあたられる方であろうと思います。学生ではありませんが立派な鬚をたくわえられ、堂々としておられました。当時京都の真宗大学の学生は皆退学して清沢先生の改革運動をお助けしお手伝いしておりました。多くの方が田舎から上洛されて、皆清沢先生と間違えて江上大成さまのところへ挨拶にでかけられたということです。今一つ加えて、龍谷大学がその前身は仏教大学と名のられていた、その前が「本願寺大学林」と呼ばれていたその時期だといいますが、仏教青年会が開かれていました。たまたま清沢先生が本願寺に用事があられ、その用事を済ませたその足で大学林の仏教青年会に臨まれたのであります。その時壇上でお話されたのが一二三深淵師という方にて、非常な熱弁を以て学生諸君に対して、諸君は大学を卒業したならば、卒業証書を持ったなりに、直ちに自坊にもどり、真宗の大法の伝道教化に挺身しなければならぬと熱弁を奮われたわけです。ところが学生達は聴衆の中に清沢先生のお顔を見出したのです。先生は何もお話を請われて出席されていたのではなく、ただ講師のお話を拝聴に見えていたのです。そこで学生達は是非清沢先生にお話をいただきたいと懇望されたのです。しかし先生は今日とはたまたまお話を聞きにきたのであると、お断りするのですが聴衆達は聞き入れないのです。やむなく先生は壇上に

立たれました。そのお話が菩薩に悲増菩薩と智増菩薩があることが、『成唯識論述記』にでていっているのです。増は蔵の字でなくて増上の増で、慈悲増上の菩薩と、智慧増上の菩薩ということですから。いま二三さんのお話は諸君が大学を卒業すれば直ちに自坊へもどり真宗の大法を伝道宣布せよと仰しゃるのは悲増菩薩のことをいわれるので、それも結構なことではありますが、私は智増菩薩の道をおすすめしたい。大学を卒えましたところで、もう一つ更らに学問の道に精進して自己の魂を練ることが大事なことでであると述べられたということです。それによって聴衆達は非常に満足されたということです。曾我先生はこういうことは今では私だけが知っているのです、だから是非ともここで話しておかばならぬと思うのですといわれるのです。清沢先生は顔の黒い背の低いお方であったと皆申すのでありますが、曾我先生は清沢先生を生涯の師と仰いでおられるので、先生を師と尊敬しているわれわれから見ると先生のお顔はいつも光り耀いておられました。聖人の『和讃』に「源空光明はなたしめ門徒につねにみせしめき 賢哲・愚夫もえらばれず 豪貴鄙賤もへだてなし」とありますが、曾我先生は清沢先生のお顔はいつも光明でかがやいて拜めたといわれるのです。

四 我如来を信ずるがゆえに、如来在ます也

次の昭和四十年には曾我先生は九十歳を迎えられます。十月十七日頌寿記念の祝賀会と共に謝恩会が盛大に営まれました。発起人として鈴木大拙先生、金子大栄先生、宮本正尊先生、山口益先生、それに本山側より訓覇信雄総長が加っておられました。そして前日の十月十六日、十七日の両日は本学講堂に於て先生の頌寿記念の講演会が催されました。はじめに金子大栄先生の挨拶を兼ねて「諸仏と善知識」と題するお話がありました。次いで曾我先生は「如来あるが故に信ずるか、信ずるが故に如来あるか」と題してお話があったのです。この題目について、曾我先生は、清沢先生が明治三十四年十月から三十五年の十一月まで、一ケ年余り真宗大学の学長をなされておられました頃、先生

の学生に対するお話のなかに、如来がいますが故に信ずるのか、われわれの信心というもの、その要望にこたえて如来があらわれてくださるものか、それはどういうものであるか、一つ諸君の問題として考えてみるよう教えられたこととあります。ところが今年九十歳を迎えて五月半ば頃であります、大分県の四日市別院でお話をしている間に忽然としてその問題を思い出したといわれるのです。もう何十年、七十年余りもたつて忽然として思出したのであります、それは忘れておったというよりも、心の深い深層意識のところに、先生の掲げられた問題が生きておって、自分を育て自分を指導下さったにちがいありません。これあるがゆえに今日まで歩かせていただいたのであります。清沢先生がなかったら、だれもそういうことを教えてくださる人はなかっただろうと思うと仰しゃっておられます。これは二日間にわたる長いお話で、これは先生の頌寿記念の出版として刊行されているので御参照いただきたいと思えます。この本では先生はその題号を『我如来を信ずるが故に如来在ます也』と答えられています。

この本のなかに（七十三頁ですが）清沢先生最後の教訓とあがめておられますところの「我が信念」に触れてお話がなされています。清沢先生の直筆の原稿が大谷大学の図書館に所蔵されていますが、それによりますと「我は此の如く如来を信ず」という題になっています。副題というかたちで「我信念」とつけてあるのです。これなどよく見ると、信仰とか信心という言葉を用いないで「我が信念」と、信念という言葉で述べられています。わたしなどは宗教的の信念という言葉で、宗教的という言葉に形容詞にして信念の言葉を使っています。信念と信仰とはどう違うのかといわれませんが、やはり宗教の信念では自覚という意味が非常に重大なことであります。こういうことで清沢先生が「我が信仰」といわずに特に「我が信念」という言葉が使われたように思うと仰しゃっておられます。この文章のはじめに「信念」ということと、如来ということと二つのことがあるが、それは二つであるけれども、わたしにあっては一つのものだ。そういうことがらからだんだん話をしておいでになる。まず信念から話をはじめられ、そして信念というものを考えていくと、如来ということはどういうことであるかということが自然に徹底していくことができる。と、こう

いうのもって、わが信ずる如来は無限の智慧であり、無限の慈悲であり、またわが信ずるところの如来は無限の能力である、無限の力である。このように推していかれました、その言葉について一ヶ条、一ヶ条について明瞭にして、その文章は終わっておるのです。で、わたしはこの文章をみますと、如来しますゆえに信ずるのであるかについて、最後はそうなっている。最後には如来しますゆえに信ずるとなっておるけれども、「我は此の如く如来を信ず」という題目をみますというと、信ずるといふことと如来といふことは全く相離れない。深い内面的というか、深い歴史的というか、切っても切れない深い関係。関係というのは仏教の言葉でいえば因縁がある、そういうことが「我が信念」の文章を読みますとわかる。

とにかく信ずるといふことを離れて、如来しますといふことは考えられない。信じられない人には、全く如来などといふことはわからない。わからないものは要するにないものだ、こういう気の短かい人は思うんであります。如来はとにかく仏教でいうならば、宿善とか宿縁というものがあって、多生曠劫の宿縁というものがあって、如来しますといふことをはじめて知らせていただく。こういう点は他の宗教、キリスト教をはじめとして他のいろいろの宗教と仏教とは大へんな違いがある。こういうことを清沢満之先生の教えによって知らせてもらうようなわけでございます。

五 他力の自覚道

さてやや時間が過ぎてまいりましたが、清沢先生の時代にはわれわれの宗門にもすぐれた学匠が多くおられました。南条文雄博士のことは先にも触れましたが、例えば村上專精博士がおられますね。これまでの仏教学に新しく歴史学を導入され、「仏教統一論」の著述が有名であります。始めて東京大学で仏教学を講ぜられて、そのことに感激して安田善次郎氏が安田講堂を大学に寄附されたと承っています。そのほか前田恵雲博士がおられますね。ところが

曾我先生はこれらの学匠方は、いま仏教学を建築物に譬えて見ると、学問の上層建築の研究に御苦勞下されたのでありますが、清沢先生はひとり他力信心を如何にしてわが身に獲得するかという、自分にとり最も大切な、人生に於ける最大事件といわれました。その安心を獲る基礎工事、その地下の基礎工事を深く掘り下げて下さったことはまことに有り難いことであつたとその御恩に曾我先生は深く感謝されているのです。

清沢先生に先生の三部経といわれて生涯先生の坐右から離されなかつたのであります。まず真宗安心の第一の書として掲げられたのが『歎異抄』であります。次に『阿含経』であります。先生は『阿含経』読誦について、阿含を小乗仏教として貶しめているが、大乘の仏教徒が読めば大乘の経典となり、われわれ他力門の教をうけたものから見れば他力門の経典となるのだということ語られたというのです。これは先生の骸骨時代のことですが、三重県の二見浦に関西仏教青年会が開かれて清沢先生が講師として招かれて、先生は徒歩でかけられたというのです。その会合に姉崎正治氏がまだ東京大学の学生であつた頃、先生の講演に会われたのであります。そしてお話のなかに「阿含小乗と貶しめるけれども、大乘教徒には大乘の経典となり、他力門のものには他力の経典となる」というお話を聞いて感激され、その印象を先生の亡くなられたときの弔状のなかに伝えておられるのであります。姉崎正治先生は後に英国に留学され、リス・デヴィッツについてパーリ仏典の阿含経を学ばれたのであります。帰国後東京大学の宗教学の主任教授として、南方仏教徒のパーリ仏典と漢訳の四阿含と比較対照して、はじめて東京大学に於て「根本仏教」として、また「現身仏・法身仏」と題して阿含仏教が講ぜられたといわれるのであります。清沢先生の場合は四阿含を読誦し、『仏本行集経』の釈迦伝を読み、その出家のところの経文を読んで涙を流して感動され、今日仏教の衰えているのは釈尊の出家精神を忘れているからである。釈尊は国をも国王たるべき地位をも捨て、父母をも妻子をも捨て、自己をも捨てて出家を遂げられた。偉大なる放棄と称讚されますが、かくて生死出ずべき道を求めてやまれないのであります。この出家の精神をみな忘れてしまつてゐる。清沢先生はわれわれ在家止住の身には、敢えて家を

出なくてもよい、生産の仕事を止めよというのでもない、ただ一切の雑行雑修の自力の心をふりすてて、他力をたのむ一念のところには、積尊の出家精神のあることを忘れてはならないと述べておられます。第三にエピクテタスの語録であります。エピクテタスは紀元一世紀、ローマにあり、身は奴隸でありながらストアの哲学を代表する哲人です。先生はその語録を「西洋第一の書」として最も敬愛されてきました。私はこのエピクテタスの語録についての曾我先生の領解をまずご紹介したいと思います。

それは昭和二十七年六月、清沢先生の五十回の法要が京都で盛大に、岡崎別院と高倉会館の両会館で営まれたのです。今日のこの法要に遠く愛知県の安城市からご出席下さっている山田亮賢先生や、加賀からは西村見暁先生たちが中心となって、三河出身の学生諸君がお世話を下され、お手伝えを下さったのであります。私は当時両肺浸潤で高熱で倒れていました。二十五年夏、京都を離れ帰国して療養することになりました。戦争末期は大阪の造兵廠の軍需工場に学生諸君と共に痔瘻という難病をかかえて深夜業に働いていました。二十年八月、京都にもどり私は若い者ですから学生部長を仰せつかっていました。部長の仕事は当時はまことに困難な食糧事情のなかなので如何にして学生に与うべき食料を確保すべきかということでした。そうしたなかに五ヶ年を経てついに結核で倒れたのです。医師のすすめもありまして以後京都での勉学をながく断念しました。二十六年五月は病床にあって老父が亡くなりました。それから奥越の小坊の住職を継承することになりましたが、次の二十七年夏には医師のすすめで、富山県城端町の国立療養所に入所して、結核の治療に専念することになりました。従って二十七年の清沢先生五十回忌にはお参りすることができませんでした。幸にしてここに当時の記念出版があり、後年それを拝読して非常なる感動を覚えました。時間も過ぎていきますので、ここへ私が持参して参りました曾我先生の『分水嶺の本願』という小冊子ですが、そのはじめに「清沢満之とエピクテタス」と題する曾我先生の五十回法要の際の記念講演が載せてあります。御紹介申し上げます。時間がありません故に、その大事な箇所を拝読させて貰います。お許し下さい。

「清沢先生は宗門改革の運動、即ち白川党の運動をなされた後、友人沢柳政太郎氏を訪ねられてから、始めて信仰の問題に新しい道が開けた。それまでは仏教の經典、特に淨土三部經、阿含經、歎異抄と色々讀まれたけれどもなかなか確固たる安心を得ることが出来なかった。たまたま沢柳政太郎氏を尋ねた時、『エピクタスの教訓』という書を同氏宅で見つけ、それを借りて讀まれた。そして始めて分限ということを了解された。勿論先生は自分等が相対有限であるとは夙に考えておられた訳であつたが、それは一般論であつて、正しく御自身の問題になるとなかなか判然しなかつたのであろう。それが「エピクタスの教訓」を讀まれて、始めて自己の分限を自覺することが、實際において自覺することが——眞実の救済であると了解できたのである。これで長い間分らぬ俣に讀んでいた仏教の經典が、氷解されることになつたのである。それによつて長い間仏教の教ゆる生死の問題について、解脱の道が見つかったのである。先生はその時の感激を「絶対他力の大道」として残されている。この文章は正に聖典である。

エピクタスは長い間身心の戦いによつて、己に属するものと、己に属せざるものとを区別することを了解した。しかしそれは何によつて、そのように分けることができるかという問題になるとエピクタスは随分長い生涯の間の悩みもあつた訳である。清沢先生は幸にもエピクタスに逢う前に、己に仏教によつて如来ということ、如来の大悲ということを教えられていた。それがあつたので先生は、エピクタスの教訓が一読のもとに自分のものとなつたのであろうと推察する訳である。如来は我等に自己の分限を教えて下さる。我等は如来を信ずることによつて、自己の分限を知らしめて頂くと、先生は短い生涯を信念確立のために一切を捧げられたのであると頂いている。先生の絶対他力の信念は、我々第三者から見ると、全くそれは戦いとられたのであると頂いている。しかし先生御自身からみると、あの劇しい戦いも、あの生死の問題の解決も、あの倫理の厳しい対決も、全人生をあげての究明も、決して先生御自身では戦いといったとは了解しておられなかつたに違ひない。無限大悲の廻向したまうところで、全く自分の力ではない。いざさか戦つたとしても、その戦力はこれも亦如来他力の賦與したまうところであると、内外併せて一切を無限

他力の賦与したもうところと、自分の力のいささかもないという、間違いない最後の安住を得られた訳である。

我々は青年時代から宗門の学校で、我が仏教学、殊に真宗の聖典について色々と教を受けた訳であるが、どうしてもすなおに受けることが出来なかったものを、今日いささかなりとも了解できるようになったのは、偏に先生の教の賜である。若し先生の教がないなら、真宗の教は全く了解できなかったであろうという私の考は、今日尚変らないところである。

絶対他力、我々の精神は我々の自由に属するもの、即ち我々の根本は信仰の自由ということである。意念の自由ということである。そのことが已に如来の我等に賦与したまうところである。従って我々はそれだけを了解されば我と我以外のものについて「分」ということを知り、「分」に安んずることが出来る。即ち絶対無限の如来が我等に賦与したもう範囲について安住し、満足することが出来る。根本は信仰の自由である。信ずる自由、即ち意念・意志の自由、これが絶対無限の如来のたまもので、このことを先生は「エピクテタスの教訓」によって自身の安住を以て、我等後輩の眼を開いて下された。

大体清沢先生の出られるまでは、他力の信念などは誰も問題にしておられなかった。そこで若し清沢先生が出られなかったなら、我が親鸞などという方は今日のように、日本の思想界の最高峰であるというようなこととはならなかったのである。偏えに清沢先生が身命を捧げて戦いとられたのである。先生自身は仰言らぬが、思想的にそれを見れば、正しく生涯を捧げて戦いとられたのである。これは日本の仏教の歴史に長く残ることである。恐らく日本の仏教史の法然、親鸞以後の最も大きな事実であると私は信ずるのである。

先生はただ如来という。これは親鸞までさかのぼると、更にくわしく「帰命尽十方無礙光如来」という、くわしくは南無阿弥陀仏ということであろう。先生は若くして死なれたので、如来と言はれたが、若し更に十年なり十五年なり、長命なされるなら、先生は必ず南無阿弥陀仏ということを教えて下されたに違いない。先生の最も有力な門弟の

一人である多田鼎師が、先生の滅後に信仰問題に悩み、先生を捨てたという悲しいことがある。若し先生がもう十年長生きなざると多田師も必ず先生の心を了解されたに違いない。これは時代というものがあつて全く先生の時代には他力の教、他力本願の教、即ち親鸞など省みられぬ時代であつた。先生はそれで親鸞の根本までさかのぼつて、如来と言はれたのであろう。そこで先生は決して南無阿彌陀仏とは言われぬ。先生の臨終に侍者の原子広宣氏が「何か遺言はありませんか」と尋ねるとただ一言、「何も無い」と言い切られたと聞いている。これは先生の極めて公明正大の精神である。先生の心をそれでありがたく頂く訳である。しかし先生が僅か四十一歳、満で申せば四十歳の若さで生涯を閉じられた、しかも全く新しく仏法を宗教の根本に立ちかえて、明らかにしようとなされたために、多田師が先生の心を正しく了解されなかつた訳である。これは一方多田師の偏狭もあろうが、又一方多田師の真面目な性格の爲めでもあつて、このような悲しい結果になつたのであろう。今日五十回忌に際して先生の直門である暁鳥師、近藤師に逢い、その喜びを感じるとともに、勿論多田師も結核で倒れてはいるが多田師が存命中先生から離れたということが何より今更の如く淋しく感ぜられることである。宿縁止むことなしであらうか。」

以上拝読させていただきました。今日「曾我先生を偲びて」と題してお話し申してきましたが、曾我先生のお顔に清沢先生のお顔が重つて、清沢先生と曾我先生とが一人格となつて、永遠に眼前に生きて私には拝まれてくるのであります。長時間御静聴いただきまことに有り難うございました。